

学校法人同志社 〈AAA+〉の格付けを取得・維持

3年連続の高格付け

学校法人同志社は、(株)格付投資情報センター(R&I)から、2004年、2005年に続き「AAA+(ダブルAプラス)」格付けの方向性・安定的一との高格付けを取得・維持しました。

5月25日に公表された「AAA+」は、21段階ある格付けの中で上から2番目のランクで、学校法人でR&Iからのランクの格付けを取得しているのは、現時点で本校と慶応義塾、早稲田大学の3校のみです。なお、同ランクの企業には松下電器産業、キヤノン、NTTドコモ、関西電力、大阪ガス等の一流企業が名を連ねています(2006年7月現在)。

なお、格付けの取得・維持は、学外からの資金調達を目的としたものでは

なく、第3者機関による経営状況の客観的評価の一つとして行うことで、同志社に対する社会的信頼性に応えるとともに、その結果を今後の学園運営に生かすためです。

経営の安定性と ブランド力を評価

高格付け維持の主な理由として、次の3点が挙げられています。

第1は、130年の歴史と伝統に裏打ちされた総合力です。「1920年には関西地区で初めて大学令に基づいて大学に昇格するなど、日本の私立大学としては有数の歴史を誇る。良心教育、キリスト教主義、自由主義、国際主義といった建学の精神は現在の組織運営にも生きている」。

第2は、ブランド力です。「2006年度の大学志願者は前年度に続いて

純増し、入学難易度も関西地区の私立大学で最も高い水準を維持している」。また、女子大学についても「志願者は前年度比2・2%減少したものの、女子大としては全国最多であった。2年目を迎えた薬学部は志願者を増やし、修業年限が4年から6年になった影響で他大学が大幅に受験生を減らす中で健闘した」との評価を受けています。さらに、小学校の開校については「市内の岩倉校地に開校した同志社小学校の募集状況も良好。幼稚園から大学までの一貫教育の実現は、法人全体の知名度向上や競争力の維持に寄与するとみている」。

第3は、経営の安定性です。今後、中学校の岩倉校地移転、大学文系学部の今出川キャンパス移転などに関して「2010年度以降に大型の投資計画があるものの、財務構成が悪化する懸念は小さい」と評価しています。

以上を総合的に判断のうえ、今回の格付けとなりました。

追悼記念礼拝——JR福知山線脱線事故 および福島でのバス事故から1年を覚えて

記録的な死傷者を出すことになった2005年春のJR西日本・福知山線脱線事故からちょうど1年目にあたる4月25日、京田辺キャンパスの「青空チャペル」において追悼記念礼拝が行われた。この日の礼拝は脱線事故で犠牲となった大学生3人、同志社女子大学特別専修生1人、またその数日後に起こった福島バス事故で亡くなった大学生1人を覚えて行われたもので、事故に巻き込まれた後に復学した学生も含めて約450人の学生・教職員などが参加した。

集会は正午過ぎから始まったが、まず最初に約20分間のメデイーションアワーがあり、オルガンの奏楽の音が流れる中、事故とその犠牲者を覚えて全員が黙祷をささげた。その後、礼拝に移り、全員で賛美歌『われをもすく

いし』（アメージング・グレース）を歌った後、司式者によって聖書（ヨハネ福音書一章二五節以下）の朗読が行われた。司式者と参加者が互いに詩編の交読をした後、犠牲となった人々の平安と遺族や関係者への慰めを求める祈りが捧げられた。これに続いて八田

英二・大学長が「いまを生きる」と題してメッセージを語った。八田学長は、亡くなった学生のご遺族から贈られたという本の中から一つの詩を紹介しながら、志なかにして命を奪われた学友たちのことを覚えてその魂の平安を祈ると共に、残された私たちが命の重さとかげがえのなさを自覚しつつ自身自身の人生を精一杯生きることの大切さ、そしてまた他者の命に対しても配慮することのできる人間となることの大切さを強調した。メッセージの後、

ふたたび全員で黙祷を捧げ、最後の奏楽を聞きながら礼拝は終了した。

この日の午後からは、同志社大学・学生テレビ局がこの事故の被害者となった4人の学生から取材したドキュメンタリー「脱線事故から1年々それぞれへの想い」の上映が多目的ホールで行われた。

また、夕方には今出川キャンパスの同志社礼拝堂においても記念礼拝（火曜チャペルアワー）が行われ、約200人が参加した。この礼拝では同志社女子大学・近藤十郎宗教部長が、自らの青年時代の体験を踏まえながら、人間の死と生についてメッセージを語った。この礼拝には事故に遭遇して長期入院を余儀なくされた後、今年3月にようやく退院することができた学生も参加した。

キリスト教文化センター助教授

越川 弘英

長男によるJ・D・デイヴィス伝。刊行90年を経て初めて同志社創立130周年記念に日本語訳が出版された。

著者は、実は同志社の隠れた恩人である。彼の誕生が、同志社創業直前の京都でなければ、デイヴィスは新島襄を見捨てて京都から撤退したであろう。新島が府知事に「校内では聖書を教えない」と妥協したことに怒って、神戸に戻ろうとしたが、出産直後の妻の体調がそれを許さなかったのである。以後、彼は古都に定住し、影の校長として初期同志社を仕切った。本書は、従来の新島伝や同志社史中、不透明部分を父親の日記等から明確にする。

著者は、父を「闘う宣教師」(Dennis, Soldier Missionary)と捉え、その生涯を活写する。だから大学在学中の南北戦争従軍は、特に記述が詳しい。

神学校を終え、牧師、宣教師となり、銃を聖書に代えてからも「デイヴィス中佐」の闘いは続く。とりわけ、同志社という砦を死守するための初期の戦闘は、自身で「南北戦争従軍以上」と告白するほど壮絶であった。

その際、意外であったのは、身内の敵である。たとえば、同志社創立に批判的な阪神地方の同僚宣教師たちは、「後ろから弾を撃ってきた」。校内では、

「闘う宣教師」の戦績簿

同志社創立130周年記念出版

J・マール・デイヴィス 著
北垣 宗治 訳

『宣教の勇者 デイヴィスの生涯』



(発行：学校法人同志社、2006年2月)

熊本バンドの指導に手を焼き、授業はまさに「格闘」と化した。一方で、バンドのひとりとは、師の額に「勇敢な兵士の残り香」を嗅ぐ(331頁)。

彼らは卒業後も、「教会合同運動」でデイヴィスを攻撃した。さらに、新島の死後、社長や有力教員となって同志社を牛耳った彼らが、ミッションに挑んだ「独立戦争」も激戦であった。

戦闘はついに同志社とミッションの破局に及ぶ。この辺りの描写は、本書の白眉である。D・W・ラーネットの「彼にとつて人生は大砲に取り囲まれた戦場」は、至言である(369頁)。もちろん、デイヴィスが愛敵精神を持つ兵士であることも、本書は伝える。

訳者の北垣宗治名誉教授は、屈指の新島研究者。英文新島伝の翻訳家としても定評がある。本書は11年におわたる労作の結晶である。面倒な索引作成と共に、そのご労苦を多としたい。

ただ、「五人を委員として」を、「五人の学生を委員として」(221頁。実は委員は宣教師)とする「筆が滑る」訳が稀にあるのは、残念である。

神学部教授

本井 康博

新島襄の旅行日記

新島襄は実によく旅をした人であり、まめに旅行日記を書きとめた人であった。旅先でも時間を無為に過ごさない人であったことが伺える。

その日記を読めば、旅の目的はもちろん大体の旅程を知ることができる。記述に精粗はあるが、道中で食べたものや難渋した場所まで分るのである。

わたしが機会あるごとに新島ゆかりの地を訪ね歩いたのは、その旅行日記がいつも念頭にあったからだ。

新島の旅先や目的などについてここで書く必要があるまいが、アメリカでの長年の生活が身についていることを伺わせる旅がある。夏休みの旅である。たいてい八重夫人同伴で、事情が許さかぎり時間をたっぷりとっている。当時の日本人にはない習慣だった。

見てもらおう本

同志社創立130周年記念に、新島の足跡ガイドブック（国内編）を書くよう記念事業委員会からいわれたとき、同志社の学生生徒を対象にした本だろうと、わたしは勝手に決めてしまった。今もそう思っている。

10歳台の若者向けだから、写真を主

新島襄を感じる場所

同志社創立130周年記念出版

『新島襄ゆかりの地—国内編』

〈執筆ノート〉

河野 仁昭

元社史資料室長



新島襄ゆかりの地

〈国内編〉

河野仁昭

（発行：学校法人同志社、
2006年3月）

にした本にする積もりだった。できれば主要地域のイラストマップも入れたかった。

予算と時間の関係でそれを断念せざるを得なかったとき、今ふうにいえば頭の中が真っ白になった。改めて立てた構想は、日本列島の北から南へかけて、なるべく簡単な説明を羅列するという常套的なやり方であった。実用性のことしか頭に浮かばなかった。

問題は、さまざまな旅での新島の旅程をどう書くかであった。春休みにも友だちとそのコースを辿ってみようと思う若者もいるはずである。重複を承知で説明を加えてはみたものの、はたしてガイドの役に立つかどうか。

新島襄を感じる場所

現在なら時間的には何ほどのことでもない土地でも、新島の時代は船と人力車と、せいぜい馬か駕籠だった。少し遠距離だと途方もない時間を要した。

その追体験はむずかしいが、目的の土地へ着いたら、新島ゆかりの特定の場所を探していただきたい。苦心して辿り着いたら、人間新島が感じられる。それがせめてもの願いである。